

2020 オリンピック 東京に決まる。問題点が徐々に明らかに

9月8日は、日本中の国民やマスコミが驚喜と熱狂しました。しかし、時間が経つてくると、問題点が少しずつ浮かびあがってきます。私は東京にいたら、多分大賛成をしたと思います。しかし、被災地にいることによって、見えて来るものがあります。

- ①街づくりからの視点です。東京への一極集中と地方の衰退が、一層進むと思います。もしも、東京ではなく大阪だったら、二極の分化が出来たかもしれません。
- ② 日本の国家財政からの視点です。日本の国家財政は1千兆円の赤字です。オリンピックのために多額の予算が使われたら、被災地の復興予算は減らされると思います。
- ③ 建設工事からの視点です。被災地の工事は、作業員や資機材の不足で、価格も20%も高騰しています。入札の不調も3割を超えています。東京で建設工事が多くなれば、被災地の工事はもっと遅れると思います。
- ④ 被災地からの視点です。東京が世界や全国から脚光を浴びれば、その分、被災地に対する風化が進むと思います。
- ⑤ 福島からの視点です。IOC総会を通じて、「東京は安全、福島は安全ではない」と言うことが、全世界に報道されました。風評によって、東北特に福島の農産物や魚がボイコットされるのではないかと心配です。

安倍首相の IOC 総会での発言

状況はコントロールされている。私たちは決して東京にダメージを与えるようなことを許したりはしない（プレゼンテーション）

▶汚染水による影響は、福島第1原発の港湾内の0.3 km²範囲内の中で完全にブロックされている。▶健康問題については、今までも、現在も、そして将来も全く問題ないということを約束する（質疑応答）（「河北新報」9月14日付け）

安倍首相の IOC 総会での発言は、次のことを明らかにしました。①悪戦苦闘している福島第一原発の現場を知らない、②放射能や被ばくについての知識が無い、③今も14万7千人が避難している福島に対しての思いがない、ことです。

その後の経過

- ▶東京電力・山下和彦フェロー「(汚染水漏れは) コントロール (制御) できていない」と発言（13日、民主党会合）
- ▶安倍首相「0.3 (km²) は (どこか) ? !」と質問（19日、福島第一原発の視察）
- ▶猪瀬都知事「今は必ずしもコントロールされていない」と発言（20日、定例会見）

「影響ないと約束」に批判 健康調査続く福島 「知識もないのに無責任」

「なぜそんな簡単に断言できるのか。私たちが信頼を得るのにどれだけ苦労している

のか、全然分かっていない」。福島県が全県民約 205 万人を対象に進めている「県民健康管理調査」の関係者は、いら立ちを隠せないように話した。」

「1945 年の広島・長崎に原爆による影響は、…それでも被爆者の子供（被ばく 2 世）への遺伝的影響など完全にわかっていないことも多く、68 年たった今も放射線影響研究所（広島市・長崎市）など多くの専門機関が研究を続けている。」

「チェルノブイリ原発事故後に現地で医療支援に携わった医師の菅谷昭・長野県松本市長も「テレビで見て、びっくりした。被ばくの影響は未解明で、約束できる性質のものではない。世界に大きな誤解を招く。この発言で安倍首相に被ばくの知識がないことが露呈した」と話す。」（「河北新報」9 月 14 日付け）

安倍首相「(放射能汚染水の) 状況はコントロールされており、東京にダメージは与えない」とプレゼン ふざけんじゃない 福島県民には今までに何の説明もないのに首相は県民よりも IOC 委員の方が大事なのか 【憤る福島その 1】

「「ふざけんじゃない。原発をコントロールできないから、汚染水にこんなに苦しんでいるんじゃないか」。福島県相馬市の漁業 I さん（54 歳）は憤る。I さんは、五輪の東京開催は歓迎するが、首相発言は別だ。「完全にブロックされている」なんて現場を知らないから言える。国外では安全と言いながら、我々には言わない。安倍さんは自分の言葉に責任を持てんのか。だったら言葉通りやってくれ」（「朝日新聞」9 月 10 日付け朝刊）

東京招致委員会の竹田理事長、4 日の記者会見で「福島とは 250 km 離れている。東京は安全だ」と発言 バカにしている 東京が安全なら福島は危険でもいいのか 招致委員会のメンバーは豪華ホテルに泊るのではなく、被災地の仮設住宅に泊れば、真実が分かるのだ（もし実現すれば、私の住んでいる仮設住宅は、滝川クリステルを希望）

【憤る福島その 2】

「「東京は安全」と強調するのは「福島の現状はひどい」と認めると言うこと。ならば、なぜ 2 年半もの間、ひどい福島を放置してきたのか。バカにしている」。福島氏から東京都練馬区に自主避難している主婦 N さん（37 歳）は憤る。」（「河北新報」9 月 7 日付）

あっぱれ佐藤真海さん 招致成功 最高のプレゼン

英語でプレゼンした佐藤選手（気仙沼市出身、走り幅跳び）は、19 歳の時に骨肉腫で片足を失ったことを説明しながら、「私がここにいるのはスポーツに救われたから。一度は絶望のふちに立たされたが、新たな目標を見つけ自信が生まれた」と強調した。

菅原気仙沼市長談「最終プレゼンでの佐藤真海さんの訴えは素晴らしい。一緒に誘致活動に努めた千田健太さん（気仙沼市出身、フェンシング）とともに郷土の誇りに思う。」（「三陸新報」9 月 10 日付け）

最後に、2020 年は、私がもしも元気でいられるならば 71 歳です。その時は気仙沼に来て、被災地に来てくれる外国人観光客に対して、「おもてなし」のボランティアをしたいと思います。